ロセッティのイタリア語の詩

ロセッティのイタリア語の詩

乾　尚史

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの作品の中には殆ど何の関心も惹かなかった一群のイタリア語で書かれた詩がある。それは大部分が短い七篇の詩であり，その中の四篇にはロセッティ自身の英訳が伴っている。これらの詩は普通にはこの詩人の作品の中では些事に属すると看做されており，一，二を除いてそれらの文学的価値は高くないことは事実である。然し乍ら，それらをロセッティの詩の種々の他の様式とは別個の一群として研究するならば，幾つかの問題が提出されるだろう。それらを考察することはより大きなロセッティの理解と鑑賞とに役立つものと思われる。

ロセッティのイタリア語の詩を研究する為の背景として，多少の注意がこの詩人のイタリア語の知識に払われねばならない。ロセッティの伝記作者達は我々の為に，ダンテ・アリギエーリから当代の政治に至る万物に関してイタリア語で口角泡を飛ばしている来客達で一杯の部屋の中で，床に寝そべってイタリア語で詩を書いている若きダンテ・ゲイブリエルの極彩色の絵を描いて呉れる(1)。我々は又この詩人の少年期の母親に託された教育に就いて，又彼が六歳にして既に如何に良く英語とイタリア語とを同様に読み書き出来たかに就いて多少の知識を有っている。彼の少年期のアリオストへの欽喜，彼の後年のダンテへの熱中的な愛好，そして彼のカヴァルカンティ，ミケランヂェロ，ボリツィアーノの読書に関しては彼の弟ウイリアム・マイクル・ロセッティの権威が証明している。キングズ・コリッジのイタリア語教授として父のガブリエーレ・ロッセッティの終生の関心はかの偉大なるフィレンツェ人ダンテの著作を研究し解説することにあり，又彼は家庭にあってはイタリア語を使用し，子供達にはイタリアの詩を朗読してやるという習慣であった。

ロセッティの最初の詩作は，実は，イタリア語によるものであって，英語によるものではなかった。ウイリアム・マイクル・ロセッティは母からの二通の手紙を子供達が受取った際に父が母に宛てて書いた1836年9月の或る手紙に言及している。短い手紙を受取ったダンテとウイリアムは大喜びで次の詩を歌ったが，ウイリアムはそれが兄の作ったものに違いないと言っている。

L'amabile Maria
Ringraziata sia
De' due biglietti suoi
Mandati ad ambi noi.[2]

この詩にはロセッティの英訳も無いので文字通りの逐語訳を試みると次のようになる。

The amiable Maria
Be thanked
For your two notes
Sent to us both.

だがしかし晩年にはロセッティは決して二国語使用者ではなかったし，恐らく妹のクリスティーナの方がイタリア語の流暢度に於ては彼に優っていたであろう。彼が私学校，及び後に1837年にキングズ・コリッジに於て正式の教育を始めた時，他の関心事には次第に多くの時間を，イタリア語の勉強には次第に少い時間を捧げたのは事実らしい。後には彼のブローニュでの滞在とロイアル・アカデミーでの絵画の研究とが彼を遠く離れた新しい関心事へと連去ってしまった。ロセッティが研究の為にも旅行の為にも一度もイタリアに行ったことがなかったのは不思議であるが，これは彼が青年時代に通例考えられている以上に英国化されていたのだということを示すものだろう。ロセッティは彼の父とはイタリア語で交通する習慣であったが，1844年までには彼はこの実行には非常に飽き飽きしていたので，その年の十二月の或る手紙で，自分のイタリア語は「非常に stentato〔難渋した〕ものなので，恐らく書き終えた時は可なり立派であるかも知れませんが，それでも矢張り自分がこんなにも不完全でいる言葉で作文するという骨折は苦痛ですから快くやめようと思っています[3]」という理由で，英語で書く許しを乞うている。

然し乍らダンテ・アリギエーリの作品へのロセッティの増大する熱中が彼を古代イタリア抒情詩人達を読む為にブリティッシュ・ミューゼアムの閲覧室への頻繁な訪問を始める気にならせたのは正しくその翌年のことであった。初期イタリア詩人達の飜訳は1849年までに完成された[4]。それらのイタリア語の意味の誤解やイタリア語の技術的熟練の欠乏の実例は，飜訳の偉大さに余りにも圧倒されているので，言及するまでもない。

ロセッティのイタリア語の詩の創作日付は不明である。Gioventù e Signoria〔Youth and Lordship〕は1881年の Poems by Dante Gabriel Rossetti に初め

て現れ，Proserpina〔Proserpine〕と La Bella mano〔The Lovely Hand〕は初めは同年の Ballads and Sonnets by Dante Gabriel Rossetti に現れた。これらには皆韻文の英訳が伴っている。La Ricordanza〔The Remembrance〕, Bambino Fasciato〔Swaddled Baby〕, 及び二篇の Barcarola〔Barcarole〕は，一篇の表題のないイタリア語のトリプレットとその英訳と共に，1901年の Collected Works に初めて現れた。

所謂イタリアのストリート・ソング，Gioventù e Signoria は，その訂正された原稿により明らかにされた如く，ウイリアム・マイクルによって彼の兄自身の創作であると断乎として主張されている(5)。ウイリアム・マイクルは又この詩に関する註の中で彼の兄が二箇国語で創作した総ゆる場合にイタリア語が第一で英語が第二であると述べている。Gioventù e Signoria のイタリア語は単純な中にも充実しており，構成は異るが，抒情詩的モチーフが初期イタリア詩に類似しているところから，彼の初期イタリア詩人達の飜訳の頃か或はその直前に作られたものと思われる。そのイタリア語の詩句の簡潔さは韻律や押韻を聊かでも固執して直訳することを不可能にしている。恐らく後にロセッティに原稿を変更させたのはこの困難さであったろう。と言うのは英訳はイタリア語よりも幾分加工と牽強附会とを示しているからである。

今一人のロセッティの友人にして伝記作者ウイリアム・シャープは Proserpina と La Bella Mano の二篇のソネットを英語からイタリア語への飜訳と看做した(6)。この点では彼は殆ど疑いなく誤っている。これらのソネットに於てはイタリア語も英語も両国語で珍しく作り出された同様な効果を示して良く出来ている。特に Proserpina に於ては相当する概念の行を逐った飜訳がある。

Lungi è la luce che in sù questo muro
　　Rifrange appena, un breve istante scorta
　　Del rio palazzo alla soprana porta.
Lungi quei fiori d'Enna, O lido oscuro,
Dal frutto tuo fatal che omai m'è duro.
　　Lungi quel cielo dal tartareo manto
　　Che qui mi cuopre; e lungi ahi lungi ahi quanto
Le notti che saran dai dì che furo.

Lungi da me mi sento; e ognor sognando
　　Cerco e ricerco, e resto ascoltatrice;
　　E qualche cuore a qualche anima dice,
(Di cui mi giunge il suon da quando in quando
Continuamente insieme sospirando,)——

"Oimè per te, Prosespina infelice!"

Afar away the light that brings cold cheer
Unto this wall,——one instant and no more
Admitted at my distant palace-door.
Afar the flowers of Enna from this drear
Dire fruit, which, tasted once, must thrall me here.
Afar those skies from this Tartarean grey
That chills me: and afar, how far away,
The nights that shall be from the days that were.

Afar from mine own self I seem, and wing
Strange ways in thought, and listen for a sign:
And still some heart unto some soul doth pine,
(Whose sounds mine inner sense is fain to bring,
Continually together murmuring,)——
"Woe's me for thee, unhappy Proserpine!"

これらのソネットはそれ自体が美しいだけでなくロセッティの飜訳家としての能力の立派な実例である。これらの詩が円熟した作品であるというより大きな証拠はこれらが二枚の絵と同行すべく作られたという事実に見られるであろう。Proserpina は恐らく1874年に画かれた同じ題名の油絵か或は1878年頃に画かれたクレオン画と同行すべく作られたのであろう。油絵 La Bella Mano は1875年に画かれ，我々はその詩を合理的に略々その頃の作と推定することが出来る。

二篇の Barcarola に向うと我々は何故ロセッティがこれらの小篇を飜訳しなかったのかと不思議に思いたくなる。しかしより厳密に調べるとそれらを正確に飜訳することは不可能だったのだということが分る。一方の Barcarola は長さ僅かに六行に過ぎず，含む語数も亦精々その二倍に過ぎない。

Oltre tomba
Qualche cosa?
E che ne dici?
Saremo felici?
Terra mai posa,
E mar rimbomba.

単なる直訳は次のようになる。

Beyond tomb

Any thing ?
And What do you say of it ?
Shall we be happy ?
Earth never rests,
And sea roars.

しかしかかる簡潔なイタリア語の詩句に集中された概念の適切な英語の相等物を提出することは明らかに不可能であって，上の直訳は唯形而下的な意味を伝えるだけのものに過ぎない。更に，イタリア語は tomba と rimbomba との好運な押韻に大きく頼っているが，これには英語の相等物はあり得ないのである。ロセッティのイタリア語は非常に stentato〔難渋した〕ものなので，この詩は極く初期の作であると推定せねばならない。同じ思想は後にロセッティにより遙かに優れた效果を以て The Sea-Limits に於て用いられた。

他方の Barcarola は幾分長いが，ここでも亦正確な飜訳は不可能である。イタリア語の魅惑的な単純さと滑稽さとの英語の相等物は無い。英語では全体の思想は粗野で浅薄となる。

Per carità,
　　Mostrami amore :
　　Mi punge il cuore,
Ma non si sa
　　Dove è amore.
Che mi fa
La bella età,
Se non si sa
Come amerà ?
　　Ahi me solingo !
　　Il cuor mi stringo ?
　　Non piú ramingo,
Per carità !

Per carità,
　　Mostrami il cielo :
　　Tutto è un velo,
E non si sa
　　Dove è il cielo.
Se si sta
Cosi colà,
Non si sa
Se non si va.
　　Ahi me lontano !

Tutto è in vano !
Prendimi in mano,
Per carità !

ここでその粗野で浅薄な英訳を提出せんとするのは，全くそれが無きに勝るが故に他ならない。

For pity's sake,
Show me love :
The heart stings me,
But is unknown
Where love is.
What does to me
The fair age ;
If is unknown
How it will love ?
Ah solitary me !
The heart squeeze me !
No more I roam,
For pity's sake !

For pity's sake,
Show me the sky :
All is a veil,
And is unknown
Where the sky is.
If it exists
Thus there,
Is unknown
If it does not go.
Ah distant me !
All is in vain !
Catch me in hand,
For pity's sake !

ロセッティのイタリア語の詩の中で最も愉快なものの一つは飜訳されなかった Bambino Fasciato である。これは親子関係という全く殊勝な主題の典型的なイタリア的論法である。主題の魅惑的な率直さと純真さとはヴィクトリア時代の英語にはうまく飜訳出来なかったし，ロセッティは上品振ることに低頭してこの短詩をその儘にしておく方が良いと考えた。

A Pippo Pipistrello

Farfalla la fanciulla:
"O vedi quanto è bello
Ridendo in questa culla!
E noi l'abbiamo fatto,
Noi due insiem d'un tratto,
E senza noi fia nulla."

しかし，この詩は，韻律と押韻さえ固執しなければ，英訳して著しく内容を損い歪めることはないように思われる。

To Pippo Pipistrello
Butterfly the girl:
"O look how lovely it is
Smiling in this cradle!
And we have made it,
We two together of a sudden,
And without us would be nothing."

これら二篇の Barcarola と Bambino Fasciato とは，初期の作で確かに二篇のソネット程後の作ではないという印象を与えるけれども，1901年までは発表されなかった。

僅か二行の詩 La Ricordanza はその英語の相等物と共に恐らく Inferno V, 121—123 中のフランチェスコ・ダ・リミニの有名な詩句に霊感を得たものであろう。然りとすれば，この詩は恐らくロセッティのダンテに対する新たなる熱中が彼をこの詩人とそのサークルとの熱烈な研究に導いた時期のものに違いない。ウイリアム・マイクル・ロセッティはそれが，初期に作られた韻文の試作ではあったかも知れないが，兎に角或る絵の銘として書かれたものであろうと考えている[7]。

ロセッティのイタリア語の詩は又飜訳術の範例としても研究され得るだろう。ロセッティは予てから飜訳者として研究されてはきたが[8]，しかし単にダンテや初期イタリア詩人達やヴィヨンやレオパルディの如き他人の詩の飜訳者としてに過ぎなかった。如何にロセッティが彼自身の詩を飜訳するかを観察することにより我々はより多く彼の手法に就いて知ることが出来よう。

ロセッティは，一方では，その飜訳の直接性や直訳性や高貴性等の為に濫りに称讃されてきた。トロンブリ教授はこの詩人の飜訳が驚く程忠実であるばかりでなく著しく逐語的で，終始原文の註に正確に調子を合わせられていることを認めている。更にガスリー教授はアルノーの1815年作の La Feuille とレオ

パルディの 1831年—35年作のその詩の imitazione とロセッティの 1869年—73年のレオパルディの詩の The Leaf への飜訳の三篇の詩を厳密に調べて，「ロセッティは飜訳から彼がその存在を知らなかった原作の詩を殆どその通りに復原した[9]」ことを発見している。ロセッティの再具象力の偉大なること，かくの如くであった。

他方では，ロセッティは慣習以上に原文の文字通りの意味から離れ，眼前にある語句の正確さを厳密に保っていないとして非難されてきた[10]。そしてこれらの脱線は押韻の困難さを逃れんが為の努力として説明されてきている。

多分ロセッティの飜訳に関する誤解はいずれも彼の手法の不十分な理解の裡に原因があるのだろう。ロセッティのイタリア語の詩を吟味すれば，彼が語を逐って，或は句を逐って字義通りに飜訳したのではなく，丁度彼の他の飜訳に於てもそうであったように，概念を逐って飜訳したことが分る。

自分自身の原作を飜訳する時でさえ，ロセッティは全体を再具象化し再考察してからそれを別の言語で再構成しに掛ったのである。換言すれば，自分自身のイタリア語の詩を英語に飜訳する時には，ロセッティは自分の原作の文を新たに具象化して，これを新しい言語に適切で妥当な概念を以て表現したのである。我々はもう一度 Proserpina に於て原作の概念の殆ど文字通りの飜訳を見よう。

Lungi è la luce che in sù questo muro
　　Rifrange appena,

Afar away the light that brings cold cheer
　　Unto this wall,

ここではイタリア語は三主要語 luce, muro, sifrange に分解され得る一つの幻想を伴っている。前二者は自然に直訳されているが，第三者を英語の refracts, 若しくはその同意語のいずれかに訳すことは原作の概念を歪めることになるだろう。ロセッティはイタリア語の詩句を語や句の点から考えず，一概念，一幻想即ち美学的統一体として考えたのである。又同じ詩の今一つの詩句は，もし原作の概念が適切で忠実な英訳を必要とするならば，自由訳を取ることが是とされることを示している。

Lungi da me mi sento ; e ognor sognando
　　Cerco e ricerco, e resto ascoltatrice ;

Afar from mine own self I seem, and wing
Strange ways in thought, and listen for a sign:

ウイリアム・マイクル・ロセッティは「心眼の前に事物や事件の明瞭な，具体的な影像[11]」を保つこの詩人の能力を認めた。尚その上に彼がかかる能力は，詩人の Vita Nuova や Divina Commedia の人物や出来事の描写が移されている，詩人の絵画に於てより一層顕著であると言っているのは恐らく間違っていないだろう。ウイリアム・マイクルは又ロセッティの原作の詩の絵画的彩色と浪漫的特質は彼の他の詩人の飜訳に於てはその飜訳された原作以上に良く現れていると考えている[12]。

従って我々がロセッティの最も明瞭に示された飜訳の手法を見るのは彼自身の詩の飜訳に於てである。ロセッティをイギリス最大の飜訳者として称讃せんとする人々はその範例を彼の手法が最も純粋であるところ，即ち彼が彼自身の原作を飜訳する時に見出す筈である。彼が如何に自己の原作の精神的，感情的態度を再具象化してから概念を逐って飜訳に取掛るかを観察出来るのはかかる場合だけである。されば我々は，ロセッティの伊・英詩中恐らく最上である，Proserpina は完全な飜訳であると言えないだろうか。このソネットに於ける如き原作とその飜訳との間の気分と效果とに於ける非凡な均衡は滅多に見られないものなのである。

註：

(1) R. L. Megroz, Dante Gabriel Rossetti: Painter Poet of Heaven in Earth (London, 1928), P. 31. 参照。Max Beerbohn もこういった境遇を面白く描写している。
(2) William Michael Rossetti (ed.), Dante Gabriel Rossetti: His Family Letters (London, 1895), I, 57—58.
(3) Rossetti, Letters, op. cit., II, 26.
(4) Ibid., I, 105.
(5) William Michael Rossetti (ed.), The Collected Works of Dante Gabriel Rossetti (London, 1901), I, 523.
(6) William Sharp, Dante Gabriel Rossetti: A Record and a Study (London, 1882), P. 305.
(7) Rossetti, Works, I, 523.
(8) Albert Edmund Trombly, Rossetti the Poet: An Appreciation (University of Texas Bulletin No. 2060, October 25, 1920) 及び B. J. Morse, "Dante

Gabriel Rossetti and Dante Alighieri," Englische Studien, LXVIII (1933—34), 227—320. を参照。

(9) William Norman Guthrie, "Translation: A Method for the Study of Literature," Sewanee Review, XVII (1909), 403.

(10) Arthur C. Benson, Rossetti (English Men of Letters; New York, 1904), pp. 151—152.

(11) William Michael Rossetti, "Dante Gabriel Rossetti as Translator: Two Letters," Sewanee Review, XVII (1909), 406—407.

(12) Ibid., 408.